令和８年３月３０日（月）　東奥日報【２１面】

ムカデ 冬期間でも活動

弘大など 落とし穴活用し確認

豪雪下の多様な生態系示す

冬期間、活動を止めると考えられてきたムカデ類やヤスデ類が、雪に覆われた地面の下で活動していることを、弘前大学と帯広畜産大学（北海道帯広市）の研究チームが本県を含む全国11地点で行った調査で明らかにした。ムカデは小さな虫を食べる捕食者、ヤスデは落ち葉などを分解する役割を担い、生態系にとって欠かせない存在。弘大白神自然環境研究センターの中村剛之教授は「今回の研究は、豪雪地帯の雪の下に広がる多様な生態系を示すもの」と話している。（菊谷賢）

中村　剛之
教授

調査は2017～20年、青森市浪岡の県民の森梵珠山と西目屋村川原平の2地点を含む本州東部と北海道の計11地点で実施した。地面に容器を埋め、上を通る虫を落として集める「落とし穴トラップ」（縦30㌢×横40㌢）を1地点につき10個設置。積雪が最大2・5～3㍍ほどに達する真冬に、雪を掘り起こして回収し、さらに雪解け前にも再調査した。

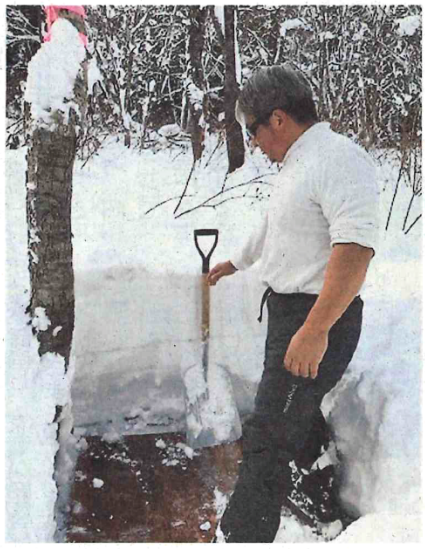
その結果、11の調査地点で雪の下から、4年間でムカデ類373個体、ヤスデ類385個体が見つかった。いずれも複数の種類にわたり、これらの生物が冬の間も活動していることが確認された。

特に一部の種類では、雪が降る前とほぼ同じ数が捕獲され、寒さの中でも動き続ける性質を持つ可能性が示された。

ムカデは、脚が多く運動性に富む肉食動物。ヤスデは湿った土壌や落ち葉の下に生息し、腐った植物を分解する節足動物。

雪の下は外の空気よりも暖かく、気温0度前後で安定している。研究グループは、この環境がムカデやヤスデの活動を支えているとみている。中村教授は「研究を継続し、クモなど他の節足動物が雪の下でどう生息しているか調べたい」と語った。

研究成果は、日本土壌動物学会の学会誌「Edaphologia（エダフォロジア）」に2月27日付で掲載された。



【写真上】落とし穴トラップの回収作業を行う中村教授＝2017年、西目屋村川原平【同下】雪の下に設置した落とし穴トラップ（真ん中の白い部分）＝いずれも中村教授提供

この画像は，当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。